

「酪農と私」

栃木県農業大学校
農学部 2年 古田 ゆう子

私が酪農を学び始めて今年で4年目になります。高校生の頃から牛も酪農も大好きになりました。酪農に出会ってからの日々はとても濃く、充実しています。その中で感じたものはとても大きいものです。

酪農とは、とてもおもしろい産業だと思います。牛の飼い方は十人十色。飼っている牛舎のスタイルも違えば、やり方や考え方も異なります。私はそんな酪農に魅力を感じています。

今、私は栃木県の農業大学校で酪農を学んでいます。経産牛10頭、未経産牛5頭の小さな繋ぎ飼い牛舎です。古い牛舎ですが、その環境でどのような工夫をすれば牛にとって良いのかを考え、今までの経験や農家さんのアドバイスを取り入れさせていただくなどしてカウコンフォートに取り組んでいます。

先ず取り組んだ内容は、当たり前のことですが、牛床をいかに清潔な状態に保ってあげられるかです。牛床が湿っていると菌の増殖や乳房炎の原因になるのではないかと考えました。そのため、搾乳時の前搾りは牛床に直接搾らないというのはもちろんのこと、搾乳後は水分の吸収効果があるカリウの粉を牛床にまくなどしています。

次に搾乳をする牛の順番です。どの牛にはどのミルクカーを使用するかを決め、体細胞が高く心配される牛は最後に搾ることや、半月に一度、全頭PL検査をするなどの工夫をしています。それぞれのミルクカーを決めることによって、乳房炎がほかの牛に移る心配もなくなり、また、ミルクカーによって誤差がある乳量も、同じミルクカーを使うことで最小限に抑えることができます。

それ以上に、このカウコンフォートをするにあたって、酪農専攻の仲間とのミーティングを行い、みんなのように思っているのかを知り、自分以外の考えも聞くことができとても参考になりました。”より良い牛舎を!”という一つの目標に向かってみんなで造り上げていく酪農は楽しいです。まだ課題はありますが、これからも学校の牛舎をプラスの方向にもっていったらと思います。

もう一つの酪農の魅力として牛の改良があります。そして、その改良を審査して頂ける共進会や体型審査は、私にとってとてもわくわくするものです。共進会では未経産牛から審査してもらえます。未経産牛の場合は、これから牛乳生産をしてもらう準備期間でもあります。その準備期間にどれだけ成長できるのかが勝負だと思います。そのためには、生まれた時からの管理が大切になってくるのではないのでしょうか。もちろん、共進会当日だけ頑張っても結果はついては来ません。経産牛も同じですが、日々の管理が良い牛を育てることの基本なのだと思います。手をかければかけるほど牛も良くなってくれます。私はそ

んなことが嬉しくて、牛の改良にも興味を持ちました。

高校時代には共進会にも頻繁に出場させてもらっていたので、大学校でも共進会でひっぱりたいと思い先生方や酪農専攻の仲間働きかけ、今年の春、大学校からは久しぶりに共進会に出場することができました。学校の牛は頭数が少ないため、未經産牛の4頭から1頭を選びました。まず農家さんにその牛を見ていただき、餌のメニューから飼育する環境をアドバイスをして頂きました。少し太り気味だったその牛は、これ以上太らないようにし、少しでもやせるよう、勢いの良い水とブラシで脂肪を刺激しました。そして共進会間近になってきた頃改めて農家さんに牛を見て頂き「牛、変わったね!」と言ってもらえました。すごく嬉しかったです。

体型は誉めてもらえましたが、もう一つ問題がありました。それは調教です。16ヶ月齢の牛でしたが、調教されたことなどなく、なかなかいうことを聞いてくれませんでした。何をしても動かず、「私の力不足だ」と嫌になってしまうこともありましたが、ほぼ毎日調教をしていると、だんだん歩いてくれるようになりました。私が頑張れば牛も頑張ってくれる、ということを感じました。

当日は涙が出そうになる程緊張しました。でも今までアドバイスをくれていた農家さんが「楽しめ!!」と言ってくれたので、リング内では1頭と1人、ひとつとなつて楽しく歩くことができました。順位はどうあれ、共進会までの過程が大事だということや周りの方々の温かさを感じることができました。

今まで酪農を学んできてまだ4年ですが、たくさんの牛に出会いました。命の誕生にも立ち会いました。また、生命の死も経験しました。酪農をやるということは、牛を扱うことの前に命を扱っていくんだということを感じています。”畜産業は生命産業である”私が実習先の牧場で耳にした言葉です。深い言葉だなと思いました。一頭一頭命であり、感情があります。だからこそ楽しくもあり、難しい酪農ですが、牛を大事にすること、命だということを忘れてはいけないと思います。畜産業ですから淘汰はやむを得ませんが、最期に牛たちが「この牧場で生まれてきてよかった」と思ってくれ、私たちも「今までお疲れ様。ありがとうね」と思ってお別れができることが大切なのではないのでしょうか。

そして、私には酪農に対しての心得があります。

1. 牛の立場になって考える。
2. 牛に優しく、人にやさしく。
3. 牛は蹴らない、殴らない。
4. 牛には愛情たっぷり。

の4つです。

そんな私の夢は、自分の牧場を持つことです。今までは牧場で働かせてもらえればよい

とっていたのですが、今は飼料のメニューからすべてを自分で考えた「自分の酪農」をしたいと思っています。理想の牧場は小規模の牧場で、30頭前後の繋ぎ飼いです。放牧場付きで、日中はそこに放牧します。未経産牛は預託に出さずに自分たちの手で育てます。初産時には分娩時の事故を減らすために和牛の種をつけ、F1を産んでもらおうと思います。また、共進会にも出品し、日々乳牛の改良に力を入れたいです。牧場内での仕事は1日ずっと仕事詰めではなく日中は自分の時間を持てるようにし、時々牛の体を洗ってあげたり、牛の写真を撮ったりできる時間にしたいと考えています。人と牛、二人三脚で楽しむ「楽農」を目指します。最近授業で聞いた、牛がゆったり飲んで、ゆったり喰って、ゆったり寝て、ゆったり反芻するリラクゼーション、Rを保て!!という言葉をおぼれずにやっていきたいと思っています。

そして、その牧場が酪農教育ファームに認定されることも夢の一つでもあります。消費者の方々に酪農体験をしていただいたり、命の大切さを子供たちに教えたいと思っています。牛乳は牛からいただいているお乳であり、お肉は私たちが生きていく上で頂いている命であることを少しでも伝えていけたらなと思っています。

こうやって私が酪農に出会えたこと、そして大きな夢を持てたことをとても幸せに感じています。酪農は動物相手で思い通りにいかないことも沢山あり、とても難しい産業だと思いますが、でも奥が深くおもしろい産業、やりがいのある産業だと思います。

今、そんな酪農も不景気などの影響を受けていますが、まだまだ活気があると思います。酪農がもっと元気になるように、学生の私にできることは、将来に向かっていっぱい勉強すること、そしてたくさん牛乳を飲むことだと思っています。

私は、可愛くて、好奇心旺盛で、でも少しビビリやさんの牛が大好きでたまりません。なのでこれからも、私にいろいろと教えてくれた農家さん、専攻の仲間、先生方、そして大好きな牛に感謝の気持ちを忘れず、酪農を頑張っていきたいと思っています。
